

変えたい。

たとえば普段はフレグランスをつけない人でも、黒い服を着た日には、ちょっと特別の香りをまとうてみたくありませんか……？

撮影/中村 淳

真夏の夜の嵐。

文・中野香織

湿

り気を帯びた熱い空気が、いつもよりほんの少し、肌と気分をゆるませていた。

昼間の雰囲気とは表情を一転させた都心のビルのテラス席で、冷えたモンラッシエのボトルをほさみ、上司とほくは向かい合っていた。スタッフが交替で夏季休暇をとる時期にあつて、その日は上司とほくだけが出勤していた。そのまま帰ってしまうのも惜しいなと思つたほくは、あるはずのない勇氣をふりしほり、冷たい白ワインを一杯飲んでいきませんか、と彼女を誘つたのだ。キャンドル越しに見るあの人は、明るい時間にてきばきと仕事を片付けていくキャリアウーマンの顔ではなく、7歳下のほくが手をさしのべたくなる少女のような笑顔を、時折、見せた。

ペンハリガン ピオニーヴ

英国の庭で咲く野生のピオニー(芍薬)の美しさを表現したかのようなフレグランス。青々とした力強さとセンシュアルなピオニーとローズの香り。50ml 1万3650円(ペンハリガン ジャパン)



黒い半袖のジャケットをぬいだあの人、黒いキャミソールドレスの上に、黒いシースルードレスを重ねていた。ほくは内心の動揺を悟られないように、盗み見た。

「黒い服を着て、体は白くて、売れ残るとシワシワになるもの、なあに？」という、このあいだの飲み会で誰かが披露していたジョークを思い出した。ドロンジョ様とあだ名される彼女を誰もが連想するわけだが、答えは「ナス」というオチ。こんなくだらないことでも引つ張り出してクールダウンしないと、ほくの理性は溶けだしていきそうだった。

させる香水が、モンラッシエの香りとまじり、ほくの鼻孔まで届いてくる。香水の名前を尋ねると、「牡丹の花をイメージした香りなのよ」と彼女は話し始める。牡丹は堂々とした大輪の花を咲かせるけれど、花言葉は「はじらい」。花びら一枚一枚の陰に妖精が隠れているからだそうだ。

風が動き、牡丹の香りがふわりと寄せてくるたび、ほくの輪郭が鈍くにじんていく。ボトルが空になったとき、そろりと彼女に手を重ねてみる。頬の赤みが強くなる。目を伏せて少女のようにはじらう彼女を、ただただ、ぎゅうと抱きしめたいと思った。

こんな嵐に抵抗することなんて無理なのかな、と彼女はつぶやく。嵐に対して無理に抵抗すると傘も折れてしまうし、コートも吹き飛んでしまいます、とほくは答えた。キザなセリフを言い切ることでできたのは、いとおしさと切なさど興奮が竜巻のような嵐になつてほくを襲ってきたから。ふれることなんてできないと思つていた大輪の黒牡丹が、こんなにも可憐(かわい)にはいかみ、ゆらいでいるなんてふだんの自分ならとてもじゃないけど言わないようなことまで言えてしまうし、できないことができしてしまう。

ほんの少し汗ばんだ牡丹とモンラッシエの香りの魔法にかけられて、ほくたちは、恋の嵐にあらがうことをやめ、運命に身を委ねることにした。予想もしない場所へと情け容赦なく連れていかれる怖さと快感にしばれながら。



なかの・かおり★エッセイスト、明治大学国際日本学部特任教授。著書に『モードとエロスと資本』(集英社新書)、『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』(新潮選書)、『愛されるモード』(中央公論新社)など。